



発行元 紀南教会  
編集委員 紀南教会瓦版  
和歌山県田辺市  
下屋敷町80  
TEL/EAX  
0739-25-1191

酷暑と言うより獄暑という様な日々が続きます。体調は如何でしょうか。今年こそは本当に大変な暑さです。でも、各地で大雨の為に大きな被害が出ています。お見舞い申し上げます、言葉ではとても足りませんが、被害に遭われた方々の健康と復旧を心から祈っています。又、大変な気温上昇の為に健康を害しておられる方々にも心からお見舞い申し上げます。こまめに水分補給をなさって下さい。編集員一同

### 三浦綾子さんと

### 粉ミルク療法

皆さん、粉ミルク療法という民間療法を知っていますか。私は先日、十四日間眠れない程お腹が痛くなりました。そして便秘をしておう吐が襲って食事を受け入れなくなりました。その間水分補給のみでしたが、腸が休まったのか徐々に動き

はじめて便秘状態だったのが、徐々に解消し始めました。四年前に検査した内科医は「腸が腫れてパンパンに脹れているので腸を休ませましょう」という判断で、エレンタールという経口栄養食で三ヶ月間過ごした事

がありました。その経験から今回も同じエレンタールを処方されたのですが、あまり美味しいものではないので変わりになる物を、と主人が粉ミルクを考案してくれました。これは、三浦綾子さんが大腸癌の手術の後、体調が優れずイレウス(腸閉塞に悩まされていた時に実践された)と記されています。そして、在宅ターミナルケアをされている方にも広く知らされて



知りました。

十四日間も痛くておう吐に苦しんで体力を消耗した私は、ミルクを前にして飲んでみましたが、口を付けてみました。疲れ切っていたせいか味も感じず飲み干しました。でもその夜はおう吐もなく痛みもなく、グツスリと久し振りに休めました。そして這うようにしてトイレに行っていたのが、ダンダンと直立で行けるようになりました。赤ちやんが育つミルクの栄養が少しづつ吸収されたのかなあと思いました。これを

続けて一ヶ月になりましたが、ようやく固形の物も少し口にできるようになり、あまり痛みもなく過ごしています。人間ですから、生きていくとどうしようもないこと、自分の力ではどうにもならない事に沢山であまいます。これは、自分だけではなく皆同じです。先人のクリスチャン三浦綾子さんもきつと難を受け入れる為の優しい方法として皆さんに紹介せずにはいられなかったのだと思います。私は神の子キリストのように受難を喜ぶなど出来そうにありませんが、せめて置かれた状況を受け入れられるようにしていきたいと思えます。その為に粉ミルク療法体験を皆さんにお話しました。



〈デク〉

### 大黒柱と大黒さん

昔、我が家には大黒柱があった。太くてドッシリとしたその柱は、家の中心に位置していた。家を支えている中心の柱。最近建てられている家には大黒柱は殆ど見られなくなったように思いますが、旧家に行けば見られると思います。子どもの頃に「地震が起きたらこの柱(大黒柱)の所にいるんですよ」と両親によく言われました。大黒柱が家をシッカリ支えているので崩壊し難いからだと言っていた。その大黒柱によく落書きをしていました。

次のような事が書かれていた。「①家の中心にあって、最初に立てる柱。最初柱。②民家の土間と床上部との境にあって特に太い柱。亭主柱。③家や団体の中心となり支えとなっている人」全く関連がないのですが、私は何時も大黒柱から「大黒さん」を連想する。子どもの頃に両親に良く話をしてもらった「因幡の白兔」だ。その話の中に大黒さんが出てくる。思い出しながら簡単に紹介しよう。

「ある島に兎達が住んでいました。向こう岸に渡りたいが泳いで渡れなかった。泳いで渡ろうとした兎の仲間たちはサメに食べられてしまった。ある兎は考えた。そして良い案が浮かんだ。そこでサメに「君の仲間は何匹だ、私の仲間の方が遙かに多いだろうね」「兎さんより私の仲間の方が遙かに多いよ」「イヤ! サメさんの方が少ないよ」

### 『詩篇23篇』



#### 【賛歌。ダビデの詩】

主は羊飼いで、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしてもあなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れ

させてくださる。命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを導く。かつて、ピアン・レモン宣教師が最晩年、病床に伏していたとき、わたしにこの詩篇を読んでも欲しいとよく言われた。それは自分自身のためであると同時に、わたしのためでもありました。わたしのためと云うのは、今から思うと、伝道者として駆け出しのわたしに、この御言葉がしみこんでいてほしいとの願いを込めて、これを読むように言われたのではなにかと思つて

また、介護センターにおられる、今年百歳になられる目の不自由なS姉を、わたしが訪問したとき、この詩篇を読んでさしあげましたところ、一言、その通りです(アーメン)と言われたのです。わたしは感動を覚えしました。信仰の戦いの中で、まさしくこの御言葉はオアシスのように私わたしたちの魂を潤したのです。詩篇は祈りです。多くはダビデ王の作と記されていますが、ボーン・ヘッファー(ドイツの牧師、神学者)はその著書「共に生きる」

の中で、詩篇を人間イエス・キリストの祈りであると言っています。イエス様はわたしたちに代わって、わたしたちの模範としてこれらを祈られたというのです。わたしたちも、このことを念頭に置いて詩篇を読み、特にこの一篇を暗記し、繰り返して祈りましょう。いつかわたしたちも、心から「アーメン」と言える信仰へと導かれることでしょう。

紀南教会牧師  
上山耕司



一 二章 一節

『およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われれるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。』

それにしても思いもよらぬ地球システムの振る舞いです。地球の歴史からすれば人類が経験したことなどたかだか知れているのでしようが、それでもそこから得られた知識、知恵で身を守らねばと思えます。

次号、39号は2013年11月24日発行予定。